

## 調査報告 7

# 発展する中国の現状と課題ー深圳と北京を訪問してー

中村学園大学 流通科学部

山 田 啓 一

### 1. はじめに

本年（平成22年）8月に深圳と北京を別々に訪問する機会を得た。深圳については8月中旬に香港訪問と併せて行った。また北京へは、8月20日～8月25日の間、中国人民大学商学院との日・中・韓国際研究会のため訪問した。本稿では、この二つの都市を訪問して筆者が肌で感じた中国の現状と課題について論じる。ただし、マクロデータによる分析でもなく、また筆者が見ることができた中国は非常に限られたものであったため、母集団としての中国の現状を表したのではなく、体験から得られたものであることをはじめにお断りしておく。

### 2. 深圳訪問

8月15日（日）に香港着、ランタオ島にある香港空港で、香港および中国深圳で働いている本学流通科学部卒業1期生の阿部敏喜君と落ち合い、リムジンサービスで深圳へ向かった。アテンドしてくれた阿部君によれば、深圳はまだまだ発展途上にあり、3か月ないし6か月で街の姿が変わるといふ。深圳の人口は、現時点で1,300万人に達しており、ほぼ東京都全体と同じ規模となっている。1978年に鄧小平氏により改革開放政策が採られ、その一環として経済特区の一つに指定されたが、当時は寒村であったとのことである。それがわずか30年くらいの間に中国南部の最大都市に成長したわけである。

深圳郊外では、街の至るところでヒューム管が山積みになっており、また道路わきを掘起こした後があった。おそらく、農地を切り開いて先に建物が建設され、後付けで上下水道などの

インフラが整備されつつあるのであろう、開発のスピードが速すぎで社会基盤の整備が遅れているように感じられた。

深圳では、以前にも泊まったことがある『吉盛酒店』に宿泊した。当地ではなかなか高級なホテルであるが、フロントでは英語が話せる従業員が1人しかいない。しかも「片言」レベルであった。フロントでは従業員同士が私語をしており、教育レベル、サービスレベルが今一つであった。

翌日、深圳を出発し、一人で香港に向かったが、中国語が全くできない筆者は、乗合バスを利用したのはよかったのだが、香港との境界にある羅湖駅までたどり着くのに冷や汗と筆談で往生した。羅湖駅では、さらにイミグレーションを行う場所が分からない、英語が通じないのである。ようやく英語がなんとかわかる人間に巡り合って、越境することができた。今後、われわれ日本人が東アジアで活動する機会が多くなることを考えると、中国語学習の重要性を改めて痛感させられた。

香港では、8月16日（月）に九龍島の中心地である尖沙咀（Tsim Sha Tsui）にある海員クラブに宿泊した。こちらは、ザ・ペニンシュラ香港やインターコンチネンタル香港、カオルーン・シャングリ・ラやホテル・ニッコー・ホンコンはじめとする高級ホテルが多く立ち並ぶ地区で、目の前の波止場からは香港島へのフェリーが運航されている。

香港では、香港中文大学の児島先生および上村先生と面談し、香港サイドから見た中国の現状と課題について包括的な所感を得ることがで

きた。さらに8月18日（水）には、阿部君の就職先である肇英集团有限公司の川副社長と面談し、香港のビジネス界からみた中国とくに華南地区の現状と課題についてお話を伺った。川副社長によれば、現在の中国はちょうど日本の高度成長期（1970年代の初頭）と同じ状況であり、日本でも当時月給が3万円から10万円に激増したし、公害問題等で苦しんでいた、とのご意見であった。

香港滞在中に巷間をぶらついて感じたことは、電気製品販売店に行けば、店頭で宣伝しているブランドは、ソニー、キャノン、ニコン、アップル等であり、中国ブランドどころか韓国ブランドもまだ日本ブランドのように大々的に名前があげられていない、ということであった。この辺が、まだ日本のブランドの強さであるかもしれないと感じた。また、スシ・バーや吉野家などをはじめ日本食のレストランがいたるところにみられ、香港での日本食の人気を再確認することができた。

### 3. 北京訪問

北京訪問は、最初から難航であった。福岡空港発14時20分発、青島経由北京行き（18時15分着予定）のため、午前11時ごろ福岡空港でスタンバイしたが、北京からのバックフライトが遅れ、18時30分ごろ福岡発となった。空港で落ち合っご一緒させていただいた福岡大同青果株式会社の大野憲俊社長によれば、中国ではこのような遅れはそんなに珍しくないとのことであった。当初の時間からカウントすれば、6時間以上も福岡空港で待たされたわけである。

ともかく、中国東方航空の北京行きに乗り、青島で一旦着陸、そこでイミグレーションを受けて、再度同じ航空機に乗り、北京へ向かった。青島空港は、前回2003年に青島海洋大学とのシンポジウムで訪中した時に比べて、北京オリンピックの空の玄関口としてハードウェアが整備され、見違えるようになっていた。以前は、日

本のローカル空港の雰囲気であったが。しかし、イミグレーションのプロセスは、旗を持った係員に誘導されて空港内を徒歩で移動させられ、必ずしも効率的なオペレーションとはいえなかった。

北京までの機内でのサービスはムダを除いた「スカイマーク」に近い方式で、ハンバーガーのような軽食が提供されただけであった。それ自体は世界の航空会社のトレンドでもあるし、国内線としては問題はない（実際にANAでも同じような方式になっている）。ただ運賃レベルからいって、国際線であることを考えると、格安航空ではないので、キャセイパシフィック航空やシンガポール航空と比べると貧弱なサービスなように感じられた。

結局北京には、午後10時半過ぎにようやく到着することができた。北京の空港から宿泊予定の市内のホテルまで、中国人民大学商学院の馬龍龍先生にアレンジしていただいた小型バンで移動した。日本よりも広くまっすぐな高速道路を延々と走り、市内へとは行って行ったが、道路および建築物すなわちハードウェアの新しさとスケールの大きさには圧倒されるものがあった。

宿泊は、四ツ星の『海潤艾丽华酒店』（ARIVA Beijing West Hotel）であり、また部屋は中二階のスイートルームで「超」のつくような豪華さであった。ただ、問題としては、外国時宿泊客が多い四ツ星ホテルであるにもかかわらず、国際共通言語である英語があまり通じなかったこと、フロント、バー、レストラン等でのサービスレベルがまだそれほど高くはなかったこと（従業員教育があまりできていないこと）があげられる。たとえば、夜バーで飲んだときのことであるが、開店しているはずのバーに店員およびバーテンダーがいない。ホテルの従業員があわてて飛んできて、「係員を呼んでくるからちょっと待て」という。結局かなり待たされることになった。

北京滞在3日目には、「万里の長城」を見学するチャンスを得た。あいにくの雨であったが、土曜日ということもあって混雑していた。われわれが訪ねた場所は、人気のスポットのようで、観光地として非常に洗練された形で整備が行われていた。万里の長城の記念館などもあり、土産物店、休憩所等々、北京オリンピックに併せてリノベートされたものと思われ、新しくきれいな建物ばかりであった。しかし、復路の山下りは往生した。雨が降っていたこともあったが、大交通渋滞に巻きこまれ、いつホテルに戻るかわからない状態となった。幸いドライバーの方はかなり無理をしていただいて、大型トラックだらけの渋滞の中を追い越し、すり抜けを繰り返しながら何とか北京に戻ることができた。大型トラックはどれも積載オーバー状態で速く走れない。山道は並行して2本、真ん中には鉄道の線路も敷設してあったが、渋滞中に鉄道に出会ったことはなかった。北京郊外では、まだ交通網の整備はそれほど進んでいないことが窺われた。

翌日は、北京の繁華街である王府井および前門大街を見学した。王府井は、北京中心部東城区にあるショッピングセンターで、東方広場や新東安市場などの大規模デパートや飲食店が立ち並んでいる。また、前門大街は、北京オリンピックを控えてリノベートされたショッピング街で、全聚徳、同仁堂、張一元などの中国を代表する老舗が立ち並んでいる。両方とも街並みはきれいで、日曜日の午後でもあり、人も多く賑わっていた。

北京から帰国の際、空港で土産物の買い物を予定していたが、北京空港では中国東方航空の出発ロビーでは売店がコーヒーショップだけであり、土産物の買い物はできないかを空港の係員に尋ねたところ、青島空港でできるとの答えがあった、このため、青島空港で乗り換えの際に土産物を買って求めようとしたが、乗り換え便の出発ロビー近くの売店（結構数はあった）は

ガラスの間仕切りで通路が仕切られており、そこまで行くことができなかった。徒歩でかなり歩いたところに2店舗ほどの売店があり、そこまで行き買い物をしたが、品揃えも貧弱であり、また十分な時間もなかったのもので、結局土産物を買わずに帰国することになった。

#### 4. 筆者が感じた中国の現状と課題

今回の北京訪問の目的の一つが中国人民大学での「2010年日・中・韓流通国際シンポジウム」への参加であった。その中で馬教授が、①農産物の流通の組織化、②農村金融の整備、③農産物の安全基準づくり、④物流のシステム化、⑤農産物の備蓄システムの整備、⑥農民の利益の確保などを中国の農業が抱える問題点として指摘された。

馬教授の指摘された問題は農業に関連する問題であったが、その多くはシステム化とくにソフトウェアを重点とするものである。①農産物の流通の組織化は、農協のような農産物の流通組織を作り、農産物の流通システム化を図ることであるし、②農村金融も現在日本で農協が果たしている機能の一つである。③農産物の安全基準に至ってはソフトウェアそのものであり、④物流のシステム化もハードウェアだけでなく、それをオペレートするソフトウェアが必須である。⑤農産物の備蓄システムについても備蓄のための倉庫をはじめとする物流施設（ハードウェア）だけでなくそれを運営する管理システム（ソフトウェア）が伴わないとうまく機能しないであろう。⑦農民の利益の確保もまた、方法論でありノウハウ（ソフトウェア）である。

以上に加えて、筆者が前項までに披露したエピソードおよび感想を総合すると、「ハードウェアの整備が先行しており、ソフトウェアがまだハードウェアに追い付いていないこと」および「ハードウェアの整備そのものも決して体系的に行われているわけでないこと」の2点が現状の問題であり、これらの是正が今後の課題であ

ると考えられる。日本においても高度成長時代には同様の問題と課題を抱えていたであろうことを考えると、経済発展のためのプロセスなのかもしれない。ハードウェアは容易に建設することは可能だが、それを円滑に運営していくためのソフトウェアは多くが試行錯誤と組織学習により形成される「見えない資産 (invisible asset)」であり、それを獲得するまでには長い時間が必要なのである。

## 5. おわりに

筆者が今回深圳および北京に滞在する機会を得たことは誠に幸運であった。これだけグローバル化が進展し、中国とのつきあいも多くなっているのに、われわれ日本人はこの隣国中国のことをどれだけ知っているだろうか、どれだけ理解しているだろうか。筆者に関して言えば、数名の中国からの留学生諸君と手に入る雑誌、本、テレビ、新聞、インターネットなどのメディアを通じてしか触れることができないというのが現状である。そうした理由から、以前も青島、深圳、香港などに訪問したことはあったが、今年再度中国を訪問して現地の空気に生で触れることができたことは非常に貴重であった。

そのような体験をもとに、本稿では筆者の感じた「中国の現状と課題」について述べさせていただいた。もちろん、筆者が触れることができたのは、中国という国の非常に小さな一部分の断片的かつ短期間のものにすぎず、また筆者の主観がかなりのウエイトを占めていることは否めない。その限りにおいて本稿は、きわめて不十分なものと言わざるを得ないであろう。研究論文の類としてではなく、一種の随筆として捉えていただければ幸いである。

ただ、筆者が述べさせていただきかけたことは、隣国である中国を訪問し、その成長・発展ぶりに瞠目し、その勢いというものに圧倒されたこと、この成長・発展がさらに洗練されたものに成熟していくためには、どのような視点が必要なのかについて、考えさせられたこと、である。

これらの課題が解決されたとき、中国は本当に成熟した大国として素晴らしい国になっているであろうし、このような中国をはじめアジア各国と手を携えて21世紀という新しい「アジアの世紀」を築いていくことが、わが国の果たすべき大きな役割であろう。